



日韓併合以前後ニ於ケル朝鮮ノ警察制度

憲

昭和六年十二月

滿洲新政權樹立ニ伴フ警察制度  
研究ノ好資料ト思料セラル、ヲ  
以テ參考ノ爲送付ス

憲兵司令部

0223

日韓併合前後ニ於ケル朝鮮ノ警察制度

目

次

一、日韓併合ノ経緯ト警察制度

(一) 日韓攻守同盟及日清條約

(二) 朝鮮内政改革問題

(三) 日露戦争ト對韓政策

(四) 統監政治

(五) 韓國駐劄憲兵隊

二、日韓併合ト憲兵制度

0224

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

要旨

一、韓國ノ獨立問題ハ下ノ關係約ニ依リテ解決シタルモ  
露國ノ對抗ニ依リテ我對韓政策ニ變更ヲ生スルノ  
止ムナキニ至ル

二、露國ノ韓半島攪乱ノ暴狀ニ對シ我政府ハ極東問  
題ノ解決ニ関シテ屢々露國ニ協商締結ヲ提議シ  
タルモ之ニ應セサリシヲ以テ明治三十七年二月十日  
對露宣戰ノ詔勅ヲ發セラレ翌十月仁川沖ノ露  
艦撃破ト<sup>露艦</sup>韓露國公使ノ退韓ヲ劃シ我對韓政  
策ニ一大進展ヲ來セリ

三、明治三十八年九月ノポーツマス條約ニ依リ韓國ニ  
於ケル日本國ノ優越權ヲ確認セラレタルヲ以テ

同年十一月日韓協約ヲ締結シテ韓國ニ對スル保護指導權ヲ確立シ該協約ニ基キ統監府及理事廳官制ヲ制定シ統監ヲ置キテ韓國ノ安寧秩序ヲ維持スルヌトナレリ

四  
憲兵ハ統監ノ指揮下ニ在リテ韓國顧問警察及理事廳警察官ト協力治安維持ニ任シタルカ明治四十年七月韓國ニ對スル完全ナル保護協約ヲ締結スルヤ同年十月韓國駐別憲兵隊ヲ編成シ明治四十年少將歩兵聯隊長ヨリ昇進ノ上轉ンテ憲兵隊長トナリ長(少將)以下七百八十二名ヲ以テ韓國ニ於ケル警察權ノ執行ニ任シ治安維持ノ主体トナル

明治四十一年憲兵長以下二千名憲兵補助員(韓人)

四千三百名ニ増加シ合計六千三百人ヲ以テ治安ノ維持  
ニ任ス同年十二月明石隊長韓國國駐劄軍參謀長ニ轉  
シ憲兵隊長ヲ兼掌シ明治四十二年八月明石少將ハ  
軍參謀長ノ專任トナリタルカ明治四十三年五月三十日  
伊藤親王統監ニ代リテ寺内統監就任スルヤ憲兵隊ノ  
編制ヲ改メテ韓國國駐劄憲兵隊司令部トナシ明石  
少將再ヒ隊司令官ニ補セラル、ヤ憲兵佐官以下特  
別補充ノ制度ニ依リテ増員ヲ行ヒ各道ニ一憲兵隊  
ヲ全道ニ七十七分隊ヲ配置シテ韓國ノ警察權ヲ  
憲兵ニ依リ統制ス其重要ナル理由ハ憲兵警察制  
度ハ未開人民ノ統制上最モ有利ナルト過去ニ於ケ  
ル憲兵ノ沿蹟茲經濟上有利ナリシニ在リタリ

五、以上ノ如ク憲兵警察制度ノ準備整頓ヲ待チ明治四  
十三年六月二十四日韓國警察權ノ委任條約力内  
統監ト朴總理大臣トノ間ニ締結セラル

六、韓國警察權ノ委任ニ基キ明治四十三年六月二十九日  
統監府警察官ニ制ニ依リ憲警統一制度ヲ施行セ  
ラレ憲兵隊司令官ヲ以テ警務總長ニ各道憲兵隊  
長ヲ以テ警務部長ニ充テ其ノ下ニ憲兵分隊、警察  
署ヲ統制ス 其憲兵兵力ハ三千三百余名憲兵  
補助員四千三百余名合計七千六百余名ヲ以テ  
十三管区七十分隊八百分遣所ニ増編ス

七、斯ノ如キ憲警統一制度ニ依ル 警察權ノ完備  
ノ下ニ明治四十三年八月二十一日韓併合條約力締結

セラレ憲兵ハ隊司令官（警務總長）以下三千四百九十七  
名憲兵補助員四千七百六十三名合計八千二百六十  
十名警察部ノ人員ハ五千八百二十九名合計一萬  
四千八十九名ニレテ憲兵隊司令官（警務總長）之ヲ  
統轄セリ

而レテ憲兵ト警察官トノ配置關係ハ憲兵ハ主トシテ  
（一）軍事警察上必要ノ地點、（二）國境地方、（三）暴徒草  
賊出没ノ憂アル山間僻陬ノ地方等、警察官ハ（一）  
人口稠密ニシテ繁盛ナル都邑地、（二）開港地、（三）鐵道沿  
線等秩序畧々整備シタル地方ニ配置セリ

ハ甞來憲警統一制度ニ依リ專テ國內ノ治安維持ニ任  
シ其ノ治蹟見ルハキモノアリタルカ大正八年三月一日

ノ韓國獨立萬歲騷擾事件ニ依リ其ノ治安平定  
後同年八月二十日總督府官制ヲ改正シテ憲警分  
離ノ制度トナル其ノ重要ナル理由ハ文武官ノ勢  
力の抗争ト文化ノ發達並ニ政黨一派ノ策謀ニ基因  
セルモノト認メラル。

0230

日韓併合前後ニ於ケル朝鮮ノ警察制度

一、日韓併合ノ経緯ト警察制度

(一) 日韓攻守同盟及日清條約

日清交戦ノ原因ハ明治二十七年八月一日ノ宣戦ノ詔  
勅ニモ明示シ給ヘル如ク實ニ朝鮮ノ獨立ト其ノ  
内政ノ改革トニ存在セリ故ニ我政府ハ日清交  
戦ノ第一着手トシテ先ツ朝鮮政府ヲシテ内外ニ  
向ヒ獨立國タルノ實ヲ表彰センメ又其ノ内政改  
革ヲ舉行セシメントシ直ニ大島公使ニ電訓シテ  
此ノ二大要綱ニ付韓國ト相當ノ條約ヲ締結スヘ  
キヲ命シタリ茲ニ於テ大島公使ハ数次ノ會商  
ヲ開キ明治二十七年八月二十日ヲ以テ左ノ如キ暫

五

0231

定條約ヲ締結セリ

大日本朝鮮西國政府ハ（日本曆明治三十七年七月  
二十日朝鮮曆開國五百三年六月二十日）漢城ニテ西  
國兵ノ偶々再衝突ヲ興シタル事件ヲ治メ茲ニ  
將來朝鮮國ノ自由獨立ヲ鞏固ニシ彼我ノ貿  
易ヲ獎勵シ以テ益々西國ノ親密ヲ圖ランカ爲  
茲ニ合同條款ヲ暫定スルコト

一此度日本國政府ハ朝鮮政府ニ於テ内政ヲ改  
革センコトヲ希望シ朝鮮政府モ亦其急務  
タルヲ知覺シ其ノ勸告ニ從ヒ勵行スヘキ  
各節ハ順序ヲ追テ施行スヘキコトヲ保証ス  
一内政改革ノ節目中京釜西地及京仁西地間

ニ建設スヘキ鐵道一事ハ朝鮮政府ニ於テ  
其ノ財政未タ裕ナラサルヲ慮リ日本ノ或會社  
ニ訂約シ時機ヲ見計ヒ起エセンモトヲ願フト  
雖モ目下委曲情節アリテ其運ニ及難シ依  
テ良法ヲ案出シ可成大速ニ訂約起工ノ運ヒ  
ニ至ルヲ要ス

一 京釜兩地及京仁兩地間ニ於テ日本政府ヨリ  
既ニ架設シタル軍用電信ハ時宜ヲ配慮シテ  
條款ヲ訂立シ以テ其ノ存留ヲ圖ルヘシ

一 日韓兩國ノ文際ヲ親密ニシ且貿易ヲ獎勵  
セリカ爲朝鮮政府ハ全羅道ノ沿革ニ於テ  
一通商港ヲ開クヘシ

一、本年七月二十三日王宮近傍ニ於テ起リタル西  
國兵員偶帶衝突事件ハ彼此共ニ之ヲ追究  
セサルヘシ

一、日本政府ハ素ト朝鮮ヲ助ケテ其ノ獨立自主  
ノ業ヲ成就セシメシコトヲ希望スルニ因リ將  
來朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固ニスル事宜ニ関  
シテハ西政府ヨリ委員ヲ派遣シ會同議定ス  
ヘシ

一、以上関ク所ノ暫定條款ハ畫押蓋印ヲ經タ  
ル後時宜ヲ酌量シ大關護衛ノ日本兵員ヲ  
一律撤退セシムヘシ

右暫定合同條款内永遠ニ遵守スヘキモノハ

後日更ニ條約トシテ遵守スヘシ之カ爲西國大臣記名蓋印以テ憑信ヲ明ニス

右暫定條約ヲ締結シタリト雖モ首鼠兩端常ニ其ノ嚮フ所ヲ變スルハ韓人ノ特色ナルヲ以テ更ニ之ヲ確定スル爲同月二十六日左記攻守同盟ヲ締結ス

大日本及大朝鮮西國政府ハ（日本曆明治三十七年七月二十五日、朝鮮曆開國五百三年六月二十三日）ニ於テ朝鮮政府ヨリ清兵撤退一切ヲ以テ朝鮮國京城駐在日本特命全權公使ニ代辦セシメタル以來西國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助クルノ地位ニ立テリ就ニハ其ノ事實ヲ明著ニシ併ヤテ西

七

0235

國事ヲ共ニスルノ目的ヲ達セシカ爲下ニ記名ス  
ル西國大臣ハ各全權委任ヲ奉シ訂結シタル條  
款ヲニ開列ス

第一條 此ノ盟約ハ清兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ  
撤退セシメ朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固ニシ  
日韓西國ノ利益ヲ増進スルヲ目的トス

第二條 日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ  
在シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及其糧食準備  
ノ爲々大便宜ヲ與フヘシ

第三條 此ノ盟約ハ清國ニ對シ平和條約ニ成  
ルヲ待テ廢罷スヘシ  
此カ爲西國全權大臣ハ記名調印シ憑信

ヲ照ニス

大日本國明治三十七年八月二十六日特命全權公使大島圭助  
大朝鮮國開國五百三年七月二十六日外務大臣金允植

當時我政府ニ於テハ、將來朝鮮ヲ如何ニスヘキヤト  
謂フ問題即チ、本件最後ノ大目的ハ如何ト謂フ  
問題ニ至リテハ外交軍事上ニ關シ頗ル緊切ナル  
關係ヲ有シテ米々容易ニ確立セサル狀勢ニ在リタ  
ルカ曰清ノ交戦ニ於テ日本軍カ海陸連勝ノ勢  
ヲ以テ進行シ清國ノ敗軍既ニ明白トナルヤ清  
國政府ハ欧米列國ニ哀訴歎願シ仲裁ノ勞ヲ  
依頼シタルモ列國ハ皆清國カ直接日本ニ交渉セ  
ンコトヲ慫慂シタルヲ以テ曰清西國ノ直接交渉

ニ遷リ明治三十八年三月三十日西國全權ノ間ニ於テ  
休戰條約ニ記名調印セリ  
次テ四月十七日ニ至リ西國全權ノ間ニ於テ左記講  
和條約ニ調印ス

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ西國  
及其臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議  
ノ端ヲ除クコトヲ欲シ講話條約ヲ締結スル  
爲ニ大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位  
勲一等陸奥宗光ヲ、大清國皇帝陛下ハ太子  
太傅元華殿大學士北洋大臣直隸總督一等  
肅毅伯李鴻章ニ品頂戴前出使大臣李經方  
ヲ各全權大臣ニ任命セリ因テ各全權大臣ハ

0238

互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認  
メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條 清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自  
主ノ國ナルニトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ  
損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻  
典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條 (以下畧ス)

(二) 朝鮮ノ内政改革問題

朝鮮ノ獨立問題ハ下ノ關係約ニ依リテ解決シタ  
リト雖モ我對韓政畧ノ動搖不定ナル故ヲ以テ  
韓國ノ形勢ハ半上・半下シテ殆ント適從スルト  
ニシテ知ラサルノ觀アリキ

翁ニ於テ内務大臣井上馨内政改革ノ抱負ヲ抱  
キ明治二十七年十月自ラ内務大臣ヲ辞シ駐韓  
全權公使ニ任セラレ韓國ニ赴任セリ  
井上公使ハ赴任早々國王ニ謁シテ所謂二十個  
條ノ改革案ヲ提出ス。然ルニ其献策未タ納  
レラレサルニ當リ井上公使ニ代リテ三浦梧楼公使  
トナリ彼ノ関妃殺害事件ノ發生スル等内政改  
革ノ實現ニ至ラサル際他面ニ於テ我外交上ニ新  
ニ一大勁敵ヲ出スニ至レリ。ソハ即チ清韓西  
國ヲ中心トセル露國ノ對抗状態ナリ  
露國カ一大勁敵トシテ出現シテヨリ日本ノ對韓  
政策ハ一変セサルハカラサルニ至ル。即日本帝

國カ獨力ヲ以テ擔保シ擁護シ若シハ指導監督  
スルノ權利ヲ獨占スルハ露國トノ關係ニ於テ頗ル  
不利ナルヲ看破シ茲ニ露國ト協力シ兩國ノ衛  
突ヲ避ケントスルノ消極的方針ヲ採ルニ至リ  
斯レテ明治二十九年五月露國皇帝ニコラス  
第二世ノ戴冠式ニ際シ特派大使山縣有朋莫斯科  
科ニ於テ露國外務大臣ロバノフト會商日露  
協商ニ關スル左記議定書ヲ締結セリ

第一條 日露兩國政府ハ朝鮮國ノ財政困難ヲ  
救済スルノ目的ヲ以テ朝鮮國政府ニ向ツテ  
一切ノ冗費ヲ省キ且其ノ歳入ノ平衡ヲ保ツ  
コトヲ勸告スヘシ 若シ止ムヲ得サルモノト

認メタル結果トシテ外債ヲ仰クニト必要トナル  
ニ到レハ兩國政府ハ其ノ合意ヲ以テ朝鮮國ニ  
對シ其ノ援助ヲ與フヘシ

第二條 日露兩國政府ハ朝鮮國財政上及經濟上  
ノ狀況ノ許ス限リハ外援ヲ藉ラスシテ内國  
ノ秩序ヲ保ツニ足ルヘキ内國人ヲ以テ組織セル  
軍隊及警察ヲ創設シ且之ヲ維持スルニトハ  
朝鮮政府ニ一任スルニトセリ

第三條 朝鮮國トノ通信ヲ容易ナラシムル爲  
日本國政府ハ其ノ現ニ占有スル所ノ電信線  
ヲ引續キ管理スヘシ露國ハ京城ヨリ其國境  
ニ至ル電信線ヲ架設スルノ權利ヲ保留ス

右諸電信線ハ朝鮮國政府ニ於テ之ヲ買收ス  
ヘキ手段 付キ次第之ヲ買收スルニ得  
ルモノトス

第四條 前記ノ原則ニシテ尚一層精確且詳細  
ノ定義ヲ要スルカ又ハ後日ニ至リ商議ヲ要  
スヘキ他ノ事項生シタルトキハ兩國政府ノ代  
表者ハ友誼的ニ之ヲ妥協スルニトヲ委任セ  
ルヲシ

次テ明治二十九年五月十四日京城ニ於テ日本公使  
小村壽太郎ト露國公使ウエーバートノ間ニ協定  
書カ締結セラル  
斯クノ如クニシテ日露協商ハ成ミタリト雖モ此

ノ協商ハ日本ニ於テハ對韓政畧ノ退歩ヲ意味シ  
露國ニ於テハ寧ロ對韓政畧ノ擴張ヲ意味スルモノ  
ナルカ故ニ露國ノ外交的勝利ト謂ハサルヘカラス  
而シテ露國ノ目的ハ朝鮮ニ於ケル政治的勢力ヲ  
全然日本ヨリ奪シテ之ヲ自己ノ手中ニ収メント  
スルニ在リ協商成立後未タ半歳ナラサルニ着キ  
トシテ其本体ヲ暴露スルニ至ル  
斯ル間明治三十三年一月三十日駐英公使林董ト  
英國外務大臣ラムスタウントノ間ニ清韓兩國ノ  
獨立ト領土保全維持ヲ中心トシテ彼ノ日英同盟  
條約締結セラレ東洋ノ棋局ハ著シク動搖シ  
世界ノ國際關係ニ大ナル影響ヲ及ホセリ

然ルニ露國ノ韓半島攪乱ノ策ハ漸々暴狀ヲ窮  
メ多数ノ軍隊ヲ滿洲ニ駐屯シ韓國壓迫ノ態度  
ニ出ツル外新要求ヲ北京ノ清國朝廷ニ提出シ  
テ益々滿洲ノ台領ヲ確實ニスルノ態度ヲ執リ  
加フルニ韓國ノ境域ニ於ケル露國ノ行動ハ殆ト  
半島ノ獨立ヲ侵迫スルノ野心ヲ表現シ來リタ  
ルヲ以テ我政府ハ所謂絶東問題ヲ解決スヘキ  
一ノ協商ヲ露國ト締結スルノ必要ヲ認メ小村  
外務大臣ハ明治三十六年七月二十八日ヲ以テ在露  
栗野公使ニ電訓シ交渉ヲ開始セシム

(三) 日露戦争ト對韓政策

日本政府ノ協商提議ニ関シ露國政府ハ言ヲ左

右ニシテ我提案ヲ容認セス明治三十七年一月十  
三日日本政府ハ重ネテ露國政府ニ最後ノ反省ヲホ  
シ事來數次其ノ回答ヲ促シタルモ徒ラニ時日ヲ遷  
延シテコレニ應セサルノミナラヌ多數ノ軍隊ヲ  
韓國々境ニ集中シテ戰鬪準備ニ着手シタルヲ  
以テ我政府ハ二月四日御前會議ヲ開キ此ノ談判  
ヲ斷絶シ露國ノ爲ニ侵迫セラレタル我地位ヲ防  
衛シ茲我權利ナ利益ヲ保護センカ爲必要ト認ム  
ル獨之行動ヲ採ルニ決シ翌五日露國交斷絶  
ノ通牒ヲ發シ越ハテ七日小村外務大臣ハ新聞記  
者ヲ官邸ニ招キテ交渉顛末ヲ公示セリ  
二月六日我聯合艦隊ハ佐世保ヲ發シ八日夜半

旅順ヲ襲撃シ九日正午仁リニ露艦ヲ撃破シ翌  
十日宣戦ノ詔勅カ煥發セラル  
開戦前迄ハ凡有手段ヲ盡シテ韓廷ニ壓迫ヲ試  
ミ威嚇ニ次クニ脅迫ヲ加ヘタル京城駐劄露國公  
使バウロウモ日本艦隊カ仁リ沖ニ露艦ヲ撃滅  
スルヤ二月十一日取國ノ途ニ就キタルヲ以テ韓半島  
ハ全ク日本勢力ノ下ニ取シ日本ノ對韓政策ハ此  
ノ一瞬ヲ以テ一大發展ヲ示スノ時期ニ入レリ  
斯ノレテ日露ノ戦争ハ進展シ皇軍ハ連戦連勝  
日本軍ノ錫フ處殆ント當ルハカラサルモノアリ  
茲ニ於テ我政府ハ戦争ノ主因タル朝鮮ニ對スル  
内政改善ノ指導スルノ政策ヲ着々實行セリ

就中外交方面ニ於テ最モ中外ノ耳目ヲ聳動シ  
タルハ明治三十七年二月二十三日京城駐劄日本公使  
林權助ト韓國外務大臣李址鎔トノ間ニ締結セラ  
レタル友記日韓議定書ニシテ對韓政策發展ノ  
表徴ナリト謂フヘシ

第一條 日韓兩帝國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保  
持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲大韓帝國政  
府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善  
ニ関シ其ノ忠告ヲ容ルヘシト

第二條 大日本帝國政府ハ大韓國ノ皇室ヲ確  
實ナル親交ヲ以テ安全康寧ナラシムルヲト

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立な  
領土保全ヲ確實ニ保障スルニト

○第四條 第三國ノ侵害ニ依リ若クハ内乱ノ爲メ  
大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ  
危険アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機  
必要ノ措置ヲ取ルヘシ 而シテ大韓帝國  
政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナ  
ラシムル爲十分便宜ヲ與フルニト

大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲  
軍累上必要ノ地點ヲ臨時収用スルニトシ  
得ルニト

第五條 兩國政府ハ相互ノ承諾ヲ經スレテ後

年本協約ノ主意ニ違反スヘキ協約ヲ第三  
國トノ間ニ訂立スルコトヲ得サルコト

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本  
帝國代表者ト大韓帝國外務大臣トノ間ニ  
臨機協定スルコト

次テ明治三十七年八月二十二日更ニ日韓協約ヲ締結  
シテ韓國政府ハ外交及財政ニ關スル事項ニ付  
總テ獨斷專行スルコトナリ日本政府ノ指導ヲ俟  
ツヘキコト、セリ

(四)

## 統監政治

明治三十八年九月日露西國間ニ締結セラレタルポーツマス條約第二條ニ於テ露國政府ハ日本國ノ韓國ニ於テ政治上、外交上、軍事上及經濟上ノ卓越ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本國カ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導保護及監理ノ措置ヲ取ルニ當リ之ヲ阻害シ又ハ之ニ干渉セサルヘキヲ約シタリ

之ヨリ先同年八月十二日調印セラレタル日英同盟約款ニ亦日本國ハ韓國ニ於テ政治上、軍事上及經濟上ノ卓越ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不利顯國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進マンカ爲正當且ツ必要ト認ムル指導監理及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ承認スルコトヲ明ニシ韓國ニ對スル帝國ノ地位益々鞏固且明確ヲ

加フルニ至レリ 茲ニ於テ帝國政府ハ此ノ新關係ニ基キ  
韓國ニ對スル保護指導ヲ完フシテ益々西國ヲ結合スル  
利益共通ノ主義ヲ鞏固ナラシメント欲シ同年十一  
月十七日所謂左記日韓協約ヲ締結セリ

### 日韓協約

日本國政府及韓國政府ハ西帝國ヲ結合スル利益共  
通ノ主義ヲ鞏固ナラシムルコトヲ欲シ韓國ノ富強ノ實  
ヲ認ル時ニ至ル迄此ノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條 日本國政府ハ在東京外務省ニ依リ今後  
韓國ノ外國ニ對スル關係及事務ヲ監理指揮スヘ  
ク日本國ノ外交代表者及領事ハ外國ニ於ケル  
韓國ノ臣民及利益ヲ保護スヘシ

第二條 日本國政府ハ韓國ト他國トノ間ニ現存ス

ル條約ノ實行ヲ完フスルノ任ニ當リ韓國政府ハ今後日本國ノ仲介ニ由ラスシテ國際的性質ヲ有スル何等ノ條約若クハ約束ヲ爲ササルコトヲ約ス

第三條 日本國政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ閣下ニ一名ノ統監(レジレント、ゼネラル)ヲ置ク統監ハ專ラ外交ニ關スル事項ヲ管理スル爲京城ニ駐在シ親シク韓國皇帝陛下ニ内謁スルノ權利ヲ有ス 日本國政府ハ又韓國各開港場及其他日本國政府ノ必要ト認ムル地ニ理事官(レジレント)ヲ置ク權利ヲ有ス 理事官ハ統監ノ指揮ノ下ニ從來在韓國領事ニ屬シタル一切ノ職權ヲ執行シ並ニ本條約ノ條款ヲ完全ニ實行スル爲必要トスルハキ一切ノ事務ヲ掌理ス

スヘシ

第四條 日本國ト韓國トノ間ニ現存スル條約及約  
束ハ本協約ノ條款ニ抵觸セサル限り總テ其  
效力ヲ繼續スルモノトス

第五條 日本國政府ハ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴  
ヲ維持スルコトヲ保證ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委  
任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十八年十月十七日特命全權公使 林 權助  
光武九年十一月十七日外務大臣 朴 齊純

斯クレテ該協約ニ基キ明治三十八年十一月勅令第二百  
四十號ヲ以テ統監府及理事廳ヲ韓國ニ置クノ件ヲ  
發布セラレ次テ同年十二月二十日勅令第二百六十七號

ヲ以テ統監府及理事廳官制ヲ定メラル  
次テ明治四十年勅令第十五號、第六十五號、第二百  
九十五號、同四十二年勅令第二百四十一號ヲ以テ改廢  
セラレタリ

### 統監府理事廳官制

第一條 韓國京城ニ統監府ヲ置ク

第二條 統監府ニ統監ヲ置ク

統監ハ親任トス

統監ハ天皇ニ直隸シ外交ニ関シテハ外務大臣  
ニ由リ内閣總理大臣ヲ經其他ノ事項ニ関シテ  
ハ内閣總理大臣ヲ經上奏ヲ爲シ及裁可ヲ受  
ク

第三條 統監ハ韓國ニ於テ帝國政府ヲ代表スル條

約及法令ニ基キ諸般ノ政務ヲ統轄ス

第四條 統監ハ韓國ノ安寧秩序ヲ保護スル爲メ

必要ト認ムルトキハ韓國守備軍ノ司令官ニ對シ  
兵力ノ使用ヲ命スルコトヲ得

第五條 (中略)

第廿二條 韓國内須要ノ地ニ理事廳ヲ置ク

理事廳ノ位置及管轄區域ハ統監之ヲ定ム

第廿三條 各理事廳ニ左ノ職員ヲ置ク

理事官 奏任 副理事 奏任

屬 判任 通譯生 判任

理事廳職員ノ定員ハ別ニ之ヲ定ム

第廿四條 理事官ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ從來韓

國在勤領事ニ屬シタル事務並ニ條約及法令ニ

基キ理事官ノ執行スルキ事務ヲ管掌ス

第廿五條 理事官ハ安寧秩序ヲ維持スル爲緊急  
ノ必要アリト認ル場合ニ於テ統監ノ命ヲ請フ  
ノ違ナキトキハ當該地方駐在帝國軍隊ニ移牒  
シテ出兵ヲ請フコトヲ得

第廿六條 理事官ハ韓國ノ施政事務ニシテ條約ニ基ク  
義務ノ履行ノ爲必要アルモノニ付事緊急ヲ要シ  
統監ノ命ヲ請フノ違ナシト認ルトキハ直チニ韓  
國當該地方官憲ニ移牒シ之ヲ執行セシメ後之  
ヲ統監ニ報告スヘシ

第廿七條 (以下略)

由來韓國ハ警察力不充分ニシテ地方ノ民擾頻繁ニ発  
生シ殆ト連年ノ常習ナリ

(五)

然ルニ日露戰役ニヨリ引續キ各種協約ノ締結アリ日韓  
兩國ノ關係旧態ヲ改ハル毎ニ地方ノ儒生西班牙等漸  
次排日ノ氣勢カヲ昂メ中央ニ於ケル政治的陰謀ト暗氣  
脉ヲ通シ遂ニ明治三十九年五月ニ於ケル洪州乱ノ如キヲ  
生スルニ至リ忠清南道方面ヨリ京畿道方面ニ亘リ  
排日思想最モ熾烈ヲ極ム故ニ我政府ハ地方民衆ノ  
ハナルモノニ對シテハ隨時警察憲兵ノ力ヲ以テ之ヲ  
鎮圧シ其稍々大ナルモノニ對シテハ兵力ヲ使用シタルカ  
明治四十年下半季以來ノ暴動ハ全國ノ大部ニ亘リ  
テ其ノ兇暴ヲ逞フレタルヲ以テ一面警察官及憲兵  
ヲ増加スルト同時ニ軍隊ヲ増遣シテ剿討ニ從ハレシ  
地方維持ノ保持ニ任マリ

韓國駐劄憲兵隊

朝鮮憲兵隊ハ日清戰役ノ翌年ナル明治二十九年一月二十五日臨時憲兵隊ノ編制令ニ依リ創設セラレタルモノナルカ其組織ハ本部及三區隊ヨリ成リ總員僅カ二百三十三名ニシテ主トシテ軍用電信ノ保護ニ任シ電信提理ノ指揮ノ下ニ屬シタリ明治三十六年十二月其ノ根本的改革行ハレ韓國駐劄憲兵隊ト改稱シ電信提理ノ指揮ヲ離レ韓國駐劄軍司令官ニ屬シ從來ノ軍用電信保護警察以外ニ始メテ韓國ニ於テ我警察權ヲ執行スルコトナレリ

明治三十九年二月八日勅令第十八號ヲ以テ韓國ニ駐劄スル憲兵ハ軍事警察ノ外統監ノ指揮ヲ承ケテ行政警察及司法警察ヲ掌ルコトナレリ憲兵ハ韓國ノ顧問警察及理事廳警察官ト協力シテ國內ノ治

安ヲ維持シ一時五十有年ノ憲兵分遣所ヲ有スルニ至  
リタルカ當時我對韓政策ハ韓國ノ保護指導ヲ以テ  
絶對方針トスルニ拘ラス我憲兵ヲシテ司法行政警察  
權ヲ執行セシムルハ穩當ナラストノ議起リ爾來警察ノ  
本務ハ韓國警察官ヲ教導スヘキ顧問警察ヲシテ担  
任スルヲ本則トシタルヲ以テ其憲兵分遣所又三十二ヶ所ニ  
縮少セタルカ同年十一月二十六日勅令第二百七十八號ヲ以  
テ憲兵條例カ改正セラレ新ニ韓國ニ於テ第十四憲兵  
隊ヲ編制シ第十四憲兵隊服務規則及各分隊管區並  
配置ヲ定メラル

明治四十年七月二十四日我伊藤統監ト李總理大臣トノ  
間ニ左記日韓協約ヲ締結シ統監自ラ進ミテ韓國政  
府ヲ指導スルノ權能ヲ明ニシ且法令ノ制定ハ勿論内

治外交一切ノ事ニ関シテ統監ハ悉ク之ニ向ツテ諾否ヲ興  
フルノ權ヲ有レ日本人ヲ官吏ニ任用スルコトヲ得ル旨ヲ規定  
シ韓國政治ノ實權ハ實質的ニ又亦形式的ニ又舉ゲテ統  
監ノ掌理ニ假セリ

### 日韓協約

日本國政府及韓國政府ハ速ニ韓國ノ富強ヲ圖リ  
韓國民ノ幸福ヲ増進セムトスルノ目的ヲ以テ左ノ條款  
ヲ約定セリ

第一條 韓國政府ハ施政改善ニ関シ統監ノ指揮ヲ  
受クルコト

第二條 韓國政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政ノ  
處分ハ豫メ統監ノ承諾ヲ經ルコト

第三條 韓國ノ司法事務ハ普通行政ノ事務ト之ヲ

區分スルコト

第四條 韓國高等官吏ノ任免ハ統監ノ同意ヲ以テ之ヲ行フコト

第五條 韓國政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ韓國官吏ニ任命スルコト

第六條 韓國政府ハ統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ僱聘セサルコト

第七條 明治三十七年八月二十一日調印日韓協約第一項ハ之ヲ廢止スルコト

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十日 統監候補 伊藤博文

光武十年七月二十四日 内閣總理大臣勲章 李完用

明治四十年十月四日歩兵大佐明石元次郎陸軍少將之  
任第十四憲兵隊長之補セラルテ赴任ス

同年十月七日勅令第三百二十三號ヲ以テ左記韓國駐  
劄憲兵之関スル制ヲ公布セラル同八日陸密第一號ヲ  
以テ第十四憲兵隊編制換之関スル規定ヲ定メラル  
タルカ第十四憲兵隊ハ十月九日ヲ以テ爾ト韓國駐  
劄憲兵隊ト改稱セラル

### 韓國駐劄憲兵之関スル制

第一條 韓國之駐劄スル憲兵ハ主トシテ治安維持

ニ関スル緊急案件ヲ掌リ其ノ職務ノ執行ニ付統

監之隷シ又韓國駐劄軍司令官ノ指揮ヲ承

テ兼テ軍事警察ヲ掌ル

第二條 憲兵隊本部ノ位置並ニ分隊ノ配置及

各區ハ統監之ヲ定ム

第三條 統監ハ必要ニ際シ一時憲兵隊ノ一部ヲ

其ノ管外ニ派遣スルコトヲ得

第四條 憲兵ノ服務ニ関スル規定ハ統監之ヲ定

ム、但シ其軍事警察ニ係ルモノハ韓國駐劄  
軍司令官之ヲ定ム

第五條 前諸條ノ規定ノ外韓國ニ駐劄スル憲  
兵ニ付テハ憲兵條例ニ依ル

斯クシテ韓國駐劄憲兵隊ノ編制ハ少將以下七百八  
十二名ニシテ國內ニ六箇ノ分隊四十六箇ノ分遣所ヲ設  
置シ爾來我憲兵ハ完全ニ韓國ニ於ケル警察權ノ  
執行ニ當リ事實上治安維持ノ主体トナレリ  
明治四十年一月二十二日勅令第六號ニ依リ豫備役後

備役、歩騎砲工輜重兵科下士官以下ノ特別補充ノ制カ公布セラレ同年三月ニ至  
リ憲兵隊ノ人員ハ約二千名ニ増加セラレ尚六月ニ至リ  
韓國政府ハ勅令ヲ發シテ新ニ憲兵補助員ヲ創設  
シ韓國人中ヨリ之ヲ募集シテ韓國駐劄日本憲兵隊  
ニ依託シ日本憲兵隊長ノ指揮ニ屬シテ日本憲兵  
ノ勤務ヲ補助セラルト、シタルヲ以テ六月三十日陸  
普第三千二百九十五號ヲ以テ韓國憲兵補助員ノ服  
務ニ関シ<sup>日</sup>韓國憲兵補助員及之ニ関スル事務ヲ韓  
ノ爲ニ要スル韓國現役將校ハ韓國駐劄憲兵隊ニ  
於テ服務セラル儀ト心得フヘシトノ令達ヲ發シ  
三千餘名ノ補助員ヲ以テ國內ヲ三十九管區ニ分テ  
二百十二個所ノ分隊分遣所ヲ設置シテ之ニ配屬シ

タルカ次ノ同年八月補助員ノ数ヲ増加シテ約四千三百  
名トナレ其ノ配置編成ヲ改正シテ三十九營長已四百  
五十三個所ノ分隊、分遣所ニ増加ス  
更ニ明治四十二年一月ニハ五十一營長已四百七十一個分隊  
分遣所、派遣所ニ改メ更ニ七個分隊、五十七營長已四  
百九十三個所ノ分隊、分遣所、派遣所ニ擴張セラル  
日本憲兵ト同補助員トノ配置ノ割合ハ憲兵一名ニ  
對シ補助員約三名ニ相當ス、憲兵補助員ノ等級及  
待遇ニ就テハ一般補助員ト監督補助員トノ二階級  
トシ其ノ取扱ハ監督補助員ハ憲兵上等兵ニ一般補  
助員ハ軍隊ノ一、二等卒ニ準シ憲兵ト同一ノ服制ナル  
モ肩章ヲ附セズ監督補助員ハ上衣及外套ノ左腕  
ニ徽章ヲ附シテ之ヲ區別シ一月八月乃至十六日ヲ

給<sub>レ</sub>日本語<sub>ニ</sub>通<sub>レ</sub>若<sub>クハ</sub>特別ノ技辭<sub>ヲ</sub>有<sub>スル</sub>者<sub>ニ</sub>八月一  
日乃<sub>至</sub>五箇ノ特別手當<sub>ヲ</sub>給<sub>レ</sub>監督補助員<sub>ニ</sub>ハ更  
ニ一月二日ノ監督手當<sub>ヲ</sub>給<sub>セリ</sub>

之ヨリ先明治四十一年十一月一日明石憲兵隊長ハ本職  
ヲ韓國駐劄軍參謀長<sub>ニ</sub>轉<sub>レ</sub>憲兵隊長<sub>ヲ</sub>兼掌<sub>シ</sub>  
後四十一年八月一日駐劄軍參謀長專任<sub>トナリタルカ</sub>  
斯ル間日韓兩國政府ノ間<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>日韓併合ノ機運ハ  
彌<sub>ニ</sub>熟<sub>シ</sub>明治四十三年五月三十日伊藤博文<sub>ニ</sub>代<sub>リテ</sub>陸  
軍大將寺內正毅統監<sub>ニ</sub>任<sub>セラル</sub>ヤ六月日韓併合  
ヲ眼前<sub>ニ</sub>シ<sub>テ</sub>憲兵隊ノ編制<sub>ヲ</sub>改メ從來ノ憲兵隊本  
部<sub>ヲ</sub>司令部ト改稱<sub>シ</sub>其下<sub>ニ</sub>各道<sub>ニ</sub>一個ノ憲兵隊本部  
ヲ置キ全道七十七個所ノ分隊<sub>ヲ</sub>設<sub>ケ</sub>六月十五日明石  
元二郎少將用ヒ入<sub>リテ</sub>韓國駐劄憲兵隊司令官トナ

ル又同日勅令第三百六十六號ヲ以テ憲兵科現役佐官  
補充ノ件ヲ公布セラレ憲兵科現役佐官ハ特種ノ勤  
務ニ服セラル場合ニ限リ他兵科ノ現役佐官ヲ轉科  
セシメテ之ヲ補充シ尙陸普第千五百七十三號ヲ以  
テ豫後備役憲兵上等兵補充ノ件ヲ達シ在韓憲兵  
下士卒ヲ召募ス

斯クシテ爾來韓國ノ警察權ハ凡テ憲兵ニ依リ統制  
セラルルコトナリタルカ其最も重要ナル理由ハ憲兵警  
察制度ハ未開ノ人民ヲ統フル上ニ於テ最も適當ナ  
ルト且韓國ニ於ケル過去憲兵ノ功績並經濟的利益  
ニ基ケルモノナリトセラルアリ斯ノ如ク憲兵警察制度  
ノ準備整頓ヲ待テ韓國警察權ノ委任ハ幸内統  
監ト朴總理大臣トノ間ニ締約調印ヲ見ルニ至レリ

幸内大將ハ明治四十三年五月三十日陸軍大臣ヨリ突然  
統監ニ任セラレタルカ幸内統監ハ六月二十日京城著ノ  
翌日ニ於テ石塚長官事務取扱ニ對シ韓國內閣總  
理大臣署理朴齊純宛ノ照會文ヲ手交シタルカ其  
内容次ノ如シ

韓國ニ於ケル現時ノ狀勢ニ鑑ミ本國政府ハ憲兵  
一千名ヲ増派警察力ノ不足ヲ補フト共ニ治安ノ  
維持ヲ完フセンカ爲韓國政府ノ警察機關ヲ  
統監府ニ移シ憲兵ト相合シテ韓國ニ於ケル警  
察事務ノ統一ヲ圖ラントス

此ノ目的ヲ以テ韓國政府ヲシテ其事務ヲ舉グテ  
日本政府ニ委託ノ手續ヲ爲サレメ其經費ハ當分  
ノ内韓國政府ヲシテ支出セシムルニ付別紙案

件ニ基キ明石少將ト打合セノ上韓國內閣總理大臣ニ對シ統監ノ訓令ニ依リ協議ヲ爲スモノナルコトヲ明言シ遂ニ之ヲ承諾セラルコト付充ナル措置ヲ執ルヘシ 尚本件ノ經過並韓國政府ノ意向等ニ付テハ一々電報ヲ以テ統監ニ報告シ重要ナル問題ニ付テハ更ニ統監ノ指揮ヲ承クヘシ

韓國首相協議案件 (別紙)

韓國ニ於テハ警察官及憲兵相補援共同シテ警察事務ヲ執行スヘキモノナルニ其ノ所屬ヲ異ニスルノ故ヲ以テ時ニ或ハ連絡ヲ欠キ機宜ヲ失スルノ虞ナレトモ 因テ其ノ執務ノ統一ヲ計ラシ力爲警察官及憲兵ニ關スル制度ヲ左ノ通り改ム

一、警察事務ヲ舉テ日本政府ニ委託セシムルニト

但シ其ノ經費ハ本年度警察費豫算額ヲ限度トシテ韓國政府ヨリ支出スルニト

二、統監府ニ新ニ警察總監ヲ置キ憲兵司令官ヲ次テ之ニ充テ統監ノ指揮監督ヲ受テ全國ノ警察事務ヲ總轄セシムルニト

三、警視廳及警察局ヲ廢シ其所轄事務ハ警察總監部ニ於テ之ヲ取扱フニト

四、各道憲兵隊長ヲ以テ道警察部長ニ充ツルニト

五、警察署、分署又ハ巡查駐在所ナキ地ニ於テハ憲兵分隊又ハ分遣所ニ於テ其ノ

事務ヲ執行スルコト

六、警察ニ関スル費用ハ當分ノ内韓國政府ノ負擔トシテ之ヲ經理セラルコト

七、従前ノ憲兵補助員ハ之ヲ憲兵隊ノ附屬員トスルコト

八、在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ関スル明治四十年十月二十九日ノ取極書ハ當然廢止セラルコト

九、新ニ巡查補ヲ置キ憲兵補助員ト同一ノ取扱ヲ爲スコト

十、從來韓國ノ警察署ニ於テ使用セル土地建物ハ總テ其儘日本政府ニ使用セラルコト

韓國政府ニ於テ警察署ノ使用ニ充ツルノ